オフィス大変革時代

OJ Introduction

■品川インターシティ

■本社ロビー
（B棟3階）

感性に呼応するオフィス

情報環境インフラが予想を上回る速度で
進展する21世紀において、
オフィスにおけるコミュニケーションは、
どのように変貌するのだろうか。
情報通信技術を活用して業務の高効率化
を図るとともに、人と人とが直接ふれあい、
情報を共有化し、知恵を結集し、
高い創造力を生み出すコミュニケーションの場
——これがスーパーゼネコン・大林組の
新東京本社における基本コンセプトである。

情報の交流する「広場」

A forum
for exchan
informatio

■インターフォーラム
スモールアトリウム内にある階段で、各フロア間の自由な往来が可能。18階から28階の吹抜空間を垂直に貫く壁面は、35個の円弧を組み合わせたデザインにより、広場に活気を与えるだけでなく、内部に光源をもつライトボックスとして照明機能もある。

次世代型マクロポリス"品川"に本社機構を集約

「21世紀の新都心にふさわしい都市空間の形成」を基本目標に、大規模な再開発事業やインフラ整備が急ピッチで進む品川駅東口地区。そのリーディングプロジェクトが《品川インターシティ》。今回ご紹介する株式会社大林組は、この20世紀を代表する大規模プロジェクトの設計・施工を担当するとともに、共同事業者の一社として参画。しかも、多様なプロジェクトに的確で機動的な組織対応を図るため、99年1月、都内十数ヵ所に分散していた本社機構をこの地に統合。超高層オフィスタワーB棟(31階建・延床面積9万3000㎡)の地下2階、地上3階および14～30階の約4万400㎡をテナントとして使用している。再開発事業のすべてに携わった同社のノウハウを結集し、人の感性に優しく呼応する最先端オフィスを構築。21世紀へ向けて新たなスタートを切った。

■執務フロア（基準階）
ローパーティションによりコミュニケーションを阻害しない執務空間を実現。各個人用の内線電話には館内PHSを導入、机の移動による配線工事が不要。

■情報資料センター（23階）
社員食堂と同じフロアに配置。豊富な資料や図書類をいつでも気軽に閲覧できる。

■プレゼンテーションルーム（14階）
パソコン操作のオーディオ、ビデオ機器を設置。高解像度プロジェクター2台の使用が可能。

■シティサイドカフェ（23階）
フロアの海側と陸側に多人数を収容できる食堂を設置。

■ブロードウェイ（23階）
フロアを斜めに横断する大通りに3つの社員食堂やラウンジを配置。昼時は大勢の社員で賑わう。

コミュニケーション重視のオフィス環境

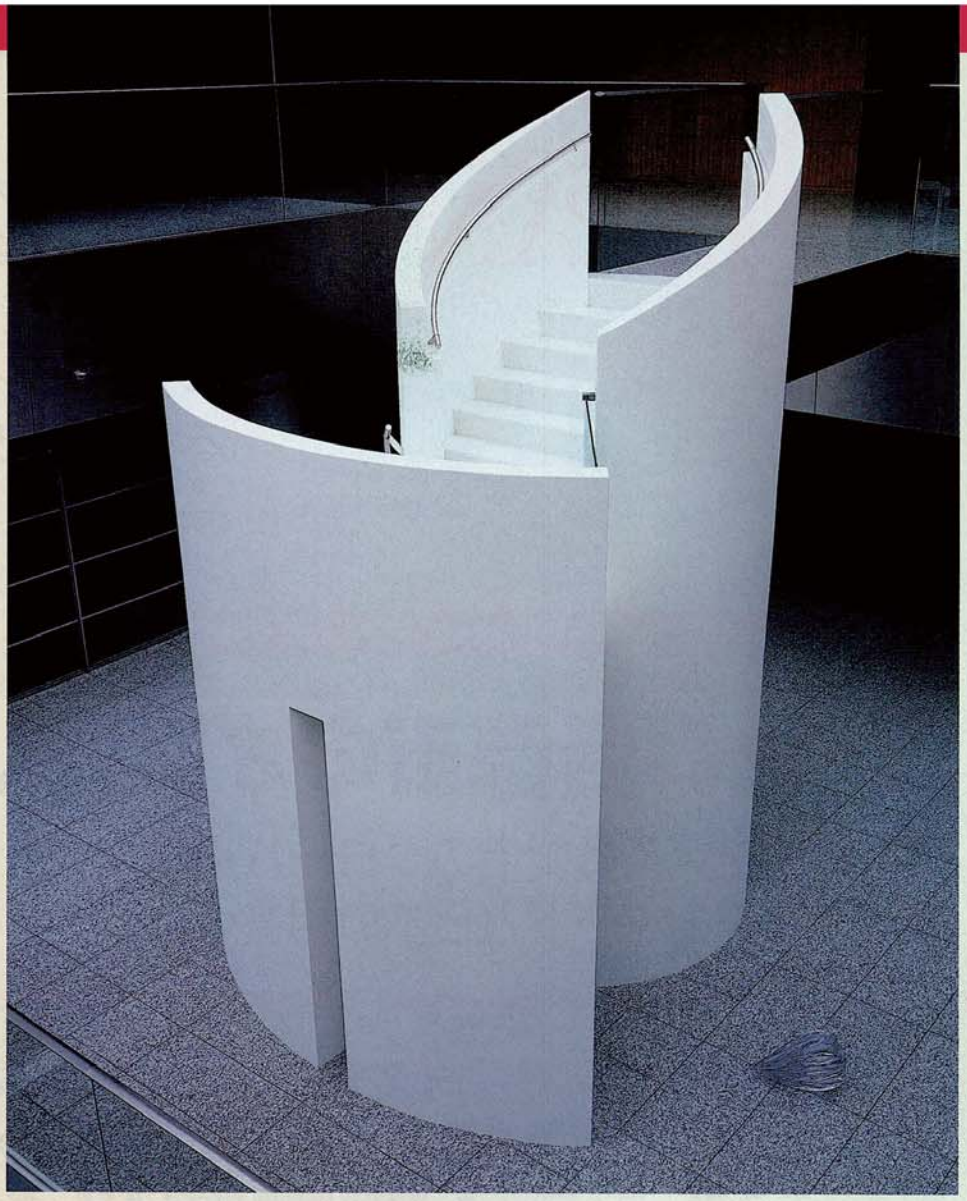
オフィスワーカーがFace to Faceで情報を共有化し、高い創造力を生み出す空間 ── オフィスの在り方をこのように捉えた同社は、コミュニケーションを誘発する場として、建物の中にあたかも立体的な街が存在するかのような空間を創出。建物中央に位置する「インターフォーラム」は、18～28階のスモールアトリウムに階段を設けて、上下階を自由に通行できるようにし、"広場"的な機能をもたせた。フロア毎に分断されていた従来のオフィスビルと異なり、インフォーマルなコミュニケーション機会を提供する。さらに、23階の社員食堂フロアには、ビル内を斜めに横断する「ブロードウェイ」が設けられ、大通りに面して3つの食堂、ラウンジ等が展開されている。縦軸と水平面を有機的に結ぶ"街"の形成 ── 本社移転で集結した約2,300名の社員の一体感が育まれ、業務の高効率化が一層進化することとなった。

建築空間とアートのコラボレーション

「創造力と感性を磨き、空間に新たな価値を造る」「個性を伸ばし、人間性を尊重する」という同社の二つの企業理念が空間デザインに投影されている。その代表的な例が、ワーカーが情報交流を行う場にアートを積極的に導入した点だ。社員の個性を引き出す、まったく新しいコミュニケーション環境づくりを追求した、そのコンセプトは、“建築空間とコンテンポラリーアートの融合”。アート・コンサルタントの南條史生氏の協力のもと、国内外で活躍する18組のアーティストの作品を、単なる芸術作品の展示という枠を超え、インテリアとして組み込んだのである。飽きのこないシンプルなデザインを基本に、素材感を重視し、環境に優しい材料選択を行っている。これらは、来訪者へ向けて、同社の姿勢をわかりやすくアピールする役割も果たしている。

■ブロードウェイとラウンジ(23階)
壁面、床、椅子とテーブルのそれぞれが現代アートの作品となっている。

■応接室(29階)
3つの壁面を3色で塗り分け、その壁面上にそれぞれ隣の壁の色を用いた単色の絵画を設置。室内の調度品も壁と絵画の色に合わせて選ばれ、窓から注ぐ光との相乗効果により、微妙な色彩のコンビネーションを創出。他の応接室にも、部屋ごとに異なる意匠が凝らされている。



■三日月階段
機能をもった彫刻でもある、29〜30階のアトリウムを結ぶ白いらせん階段。大理石や石膏が使われている。

■企画展示コーナー(3階)
社内のアートプロジェクトに参加したアーティストの作品が展示されている。

■ポートサイドカフェ(23階)
壁に飾られた和菓子の型枠を銀メッキしたレリーフが、食空間を明るく演出。

■ラウンジ(30階)
空間に調和した彫刻作品には、基部に最新鋭の免震装置が装備されている。

新時代のオフィスを育むサポート体制

日本屈指のスーパーゼネコンならではの最新技術が生かされた設備群。中でも特筆すべきは、床吹き出し方式のフリーアクセス空調だ。これは、二重床のスペースをダクトとした床からの空調で、自由に吹き出し口の変更が可能。パーソナルな空調対応を実現した。また、オープンで広々とした執務空間を構築するため、従来の防火防煙シャッターに代わり、ウェットスクリーンシステムを採用。防火区画を形成する耐火スクリーンに水の噴霧・空調加圧を組み合わせたシステムで、日本で初めて建設大臣認定を受けた。衛生面では、社員食堂の厨房を国際的な衛生管理基準であるHACCP対応施設のモデルケースと位置づけるなど、職務環境の質的側面へ細かな配慮がなされている。なお、同新本社は昨年、快適で機能的なオフィスを対象とする第12回日経ニューオフィス賞の「ニューオフィス推進賞」を受賞した。

●取材協力／株式会社大林組